

# 英語における“Historical Present”と 日本語における“歴史的現在”の比較

都 竹 恵 子

## 序節

本稿は、英語における Historical Present (以下 HP) と、日本語における「歴史的現在」(以下 HP) の生起の仕方、その目的、違いなどについて述べるものである。 *The Conversational Historical Present in American English Narratives* (Wolfson 1982) を中心に、他の文献を交えて考察する。

第1節では、英語の HP について論じる。日本語に比べ時制に厳密とされる英語でも、英語の「現在形」が‘timeless’であることもあり、過去に起こったことを HP で表す用法がある。主な HP のパターン及びその使用の自由性や目的を述べ、その一方で規則性があることを例証する。そして、HP がなぜ、どういう時に使用されるかを述べる。また、「私」という意味で用いられる‘you’と HP との関係も検証する。

第2節では、日本語における HP について論じる。まず、助動詞「た」を用いて過去を表す「タ形」と HP を表す「ル形」の混在の原因を探り、参考文献を交えながら、過去形と HP の交替に関する規則性を例証したい。また、日本語においても HP がなぜ、どういう時に使用されるかを述べる。

第3節では、翻訳において、和訳、英訳時に原文と異なる形で HP を用いる場合について考察する。一般的に英語では過去形で表されることを、日本語では文末の単調さを嫌って HP で表すことが多い。しかし、反対に日本語では過去形であるが、英語では HP になっているという場合もある。英語から日本語、日本語から英語という翻訳時における HP への変更の実例を挙げな

がら、その理由を探っていく。

## 1. 英語における Historical Present (HP)

第1節では、HPの定義、HPの生起とそのパターン、HP使用の目的、‘you’とHPの関係について述べる。

### 1.1 英語における HP の定義

英語における HP の定義の引用を見てみよう。

- (1) the present tense, used in some languages to describe events in the past to make them seem more real (*LDOCE* 2014: 872)

このように、HPは「過去に起きたことをより生き生きと表現するために使用する現在形」と、定義されている。

#### 1.1.1 HP に対する参考意見

前項の「HPの定義」他にHPについて言及されているものを2例引用する。

- (2) Quirk *et al.* (1985: 181)

The historic present describes the past as if it is happening now: it conveys something of the dramatic immediacy of an eye-witness account.

- (3) Wolfson (1982: 11)

The traditional explanation of the function of the historical present tense, both in literature and in speech, is that the present tense is used to make the narrative vivid.

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較

(2)の下線部“an eye-witness account”とあるように、HPは、すでに起こった出来事を「話し手/聞き手」の目の前で「今」起きているかのように表す用法であると言える。その役割は、話し手/書き手が自分たちに共感してほしい、という強い思いを伝えるためだと考える。言い換えると、話し手/書き手の感情の高まりの現れとしてHPが生起するのである。

### 1.1.2 現在形の7つの働き

英語における「現在形」の一般的な使用について、Wolfson (1982: 32)が、“The first is that the so-called present tense in English is timeless.”と述べているように「現在」を表す他にも次のような働きがある。以下、綿貫・ほか編(2000: 411-3)からの引用である。

#### (4) 1 現在形の性質・状態

I **am** seventeen years old. (私は17歳です)

#### 2 現在の習慣的な動作・反復的な出来事

I usually **get** up at six and **eat** breakfast at seven. (私はふつう6時に起きて7時に朝食を食べる)

#### 3 真理・社会通念

Water **consists** of hydrogen and oxygen. (水は水素と酸素から成る)

#### 4 現在進行形の代用

Here **comes** our bus. (ほら、僕らの乗るバスが来た)

#### 5 未来の代用

Tomorrow **is** St. Valentine's Day. (あしたはバレンタインデーだ)

#### 6 現在完了形の代用

I **hear** (**am** told) there was a big landslide in Nagano. (長野で大きな地滑りがあったそうだ)

#### 7 過去の代用

It **says** in the Bible, “Love your enemies.” (「汝の敵を愛せよ」と

聖書にある)

上記のように英語の現在形は色々な時制に使用されている。従って、HPが過去のことを表すことは単なる例外ではない。この「現在形」の使用の柔軟性がHPという用法を生起させている。

## 1.2 HPのパターン

英語におけるHPのパターンとして、一旦生起するとHPが続くという傾向が挙げられる。そして、過去形で始まり、HPになり、過去形で終わる「過去形—HP—過去形」の「サンドイッチ型」となる型が、多くの場合で見られる。

- (5) I couldn't believe it! Just as we arrived, up *comes* Ben and *slaps* me on the back as if we' *re* life-long friends. 'Come on, old pal,' he *says*, 'Let me buy you a drink!' I'm telling you, I nearly fainted on the spot. (Quirk *et al.* 1985: 181) (下線部は過去形、イタリック体はHP)

引用文は前述した「過去形—HP—過去形」の型をとっており、いわゆる「サンドイッチ型」である。また、これが何度か繰り返される二つのパターンが次のとおりである。アメリカのテレビ番組 *Tonight Show* で Robert Lake が話したものである。

- (6) JC: "Somebody told me you almost got in a punch-out at a gas station."  
RL: "Oh, that gas thing, man, ... I was in a gas ... see, I got this cadillac--I drove a jeep for many many many moons but then I did a movie here in town. It was the first time I worked here in town in a long time and you no longer *drive* to the

studio and they *take* you to location. Now you leave your house and you *schlepp* all the way to location. (Interruption) So anyway I bought this cadillac because the jeep was too cold and the rain in the morning--six o'clock driving--(interruption)--I *gotta get* to work in the morning man, you *can't go* forty miles an hour on the freeway with the rain *coming* in the jeep and *try* to get to work. And you *gotta look* young and fresh when you *get* there. [...] And I said, 'Mister, you're not gonna get any gas in front of me.' (Wolfson 1982: 38) (下線部は過去形、イタリック体はHP)

(6)は「過去形—HP—過去形—HP—過去形」と繰り返しされている。どちらの例も過去形で始まり過去形で終わる。もちろんHPで始まり終わる場合もあるが、大体はこの「サンドイッチ」のパターンである。

では、なぜ主に「過去形で始まり過去形で終わる」のだろうか。2つの理由があると推察する。

- a 話し手/書き手は、まず過去に起こったことを過去形で説明し始め、それからHPを使ってその出来事が起こっている場所に聞き手/読み手を連れていき、さも聞き手/読み手が実体験できるかのように感じさせると同時に、話し手/書き手の感情の高まりや感動を伝えている。そして、説明が終わると現実の世界に聞き手/読み手を引き戻す「印」として過去形を用いている。
- b 英語の言語自体の性質に関係があるものと推定できる。過去形で始まり過去形で終わるといふ言語パターンを裏付けるものがある。Wolfson (*ibid.*: 34) が、'Indeed, as the data shows, many stories are so organized that what seems the most important event of the story is given in the past tense' と述べている。ネイティブスピーカーは自動的に途中でHPに変わっても最後は過去形で落ち着くのである。つまり、過去を用いることで、起きたことは「過去形」で事実にも忠実な形で終わるのである。英語のスピーチ/エッセイで、導入と結論を重視するのも、この点に起因すると推察する。

### 1.3 Historical Present の生起

この節では HP の使用とその目的を探る。

#### 1.3.1 HP の働きに対する参考意見

1.1で、HP は話し手/書き手が、「過去に起きたことをより生き生きとなるように表す現在形の用法」と定義している。その定義を裏付ける2つの参考意見を以下に引用する。

(7) The idea that the present tense (CHP)<sup>(1)</sup> is used in stories to take the audience back to the information state [...]. (Wolfson *ibid.*: 32)

(8) These descriptions all assume that the HP makes the past more vivid because it moves past events out of their original time frame and into the moment of speaking. Past events ‘come alive’ with the HP because it is formally equivalent to a tense which indicates events whose reference time is not the moment of the experience, but the moment of speaking. (Schiffrin 1981: 46)

どちらも前述の HP の定義に当てはまる。HP は話し手/書き手が聞き手/読み手と分かち合いたいことや、聞き手/読み手に理解してもらいたいことを伝える手段のひとつであると言えよう。ある種の追体験を聞き手/読み手に提供することによって、過去の出来事を共有することができるのである。(5)と(6)の引用は、会話における HP の用例である。この他に、会話に比べて頻度は少ないが、物語の中でも用いられ、その使用目的も会話における HP と概ね同じと言える。次の引用を見てみよう。

(9) There are, especially in long stories, many possible points at

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較

which the speaker could switch tenses and the fact that he switches in some and not at others tells us something about what he sees as important to the point he wants to make. (Wolfson 1982: 48)

このように物語の中で書き手が、特に読み手に伝えたいことを HP で表すことがある。例えば、*The Remains of the Day* (Ishiguro 1988) に出てくる HP だ。この本の中で Ishiguro が伝えなかったメッセージはいくつもあるだろうが、そのうちの3点を抽出した。次の引用から、彼は直接それを書くのではなく、HP を使って伝えたいことを表したのではないかと考察した。以下3点、HP が用いられたメッセージを挙げる。

a スティーブンスのミス・ケントンへの秘めた想い

(10) It is true, these same trivial errors did cause me some anxiety at first, but once I had had time to diagnose them correctly as symptoms [...]. But to return to her letter. It *does* at times reveal a certain despair over her present situation — a fact that is rather concerning. She begins one sentence: [...] At another point in her letter, Miss Kenton *writes*: [...] —(Ishiguro 1988: 49)

(11) Then she *goes* on to add: [...] As I entered, Miss Kenton had turned back to the window. Down below, the shadows of the poplars were falling across the lawn. [...] indeed, as Miss Kenton *puts* it so well, [...] —(*ibid.*: 50)

(イタリック体は HP)

Ishiguro は HP を使って、これらの例の他に何度もミス・ケントンや彼女の手紙に触れている。スティーブンスは、そのたびに「今」という現実「以前の

ままの彼女」を呼び寄せているかのように思われる。彼は、彼女をととても近くに感じているのだろう。我々読み手は、HP からスティーブンのミス・ケントンへの気がかり、淡い願い、そして何より深い愛を痛いほど感じさせられるのだ。

b スティーブンのダーリントン卿への忠誠と信頼

- (12) And at least he had the privilege of being able to say at the end of his life that he made his own mistakes. He chose a certain path in life, it proved to be a misguided one, but there, he chose it, he *can say* that at least. As for myself, I cannot even claim that. You see, I *trusted* <sup>(2)</sup>. — (*ibid.* : 243)

以前仕えていたダーリントン卿に想いを馳せているスティーブンスの姿に、彼の主人に対する絶大なる忠誠と信頼が読み取れる。ダーリントン卿の命令は絶対的なものであり、疑うことなど一度としてなかった。Ishiguro が HP を用いた “*he can say*” の中にスティーブンスの全ての想いが凝縮しているのである。ダーリントン卿が汚名を着せられたまま亡くなってから久しく、またスティーブンス自身も「執事」という職の終わりに近づいているにも関わらず、HP を使うことで二人が、今、その場でそれらの出来事が、進行しているかのように感じられる。そして、この場面はまるでスティーブンスがダーリントン卿の引退パーティーの最後のスピーチをしているかのようなようである。さらに、最後の言葉、“*trusted*” はスティーブンスの最後の「思いの丈」を過去形で表している。イシグロは、敢えてこの部分をイタリック体にすることで、さらその効果を狙っているのだ。1.2で述べたように、英語において一番重要で読者に伝えたかった彼の「忠誠心」を「過去形」で表している。

c スティーブンスの執事としての誇り

- (13) For instance, there *is* the matter of Mr Harry Smith’s pronouncements on the nature of ‘dignity’. There *is* surely little in



英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較  
his statements that merits serious consideration. [...] the word ‘dignity’ in a quite different sense altogether from my own understanding of it. Even so, even taken on their own terms, his statements were, surely, far too idealistic. [...] as Mr Harry Smith rather fancifully *claims* the villagers here do? — (*ibid.*: 194)

スミス氏が“dignity”「品格」を口にした時、スティーブンスは何か違和感を覚えた。スティーブンスは、全編を通してこの「品格」について語りながら、執事の本分である本物の「品格」を追い求めている。彼がいかに素晴らしい執事であるかは行間に読むことができる。従ってここでのHPがスティーブンスの本心のヒントになっていると読むのは明白である。この場面でのHPは、ただ過去から現在へと登場人物を移動させるばかりではなく、それと同時に、読者を引き付けながら「品格」とは何かを考えるように揺さぶりをかける働きがあるように見受けられる。

ここで挙げた *The Remains of the Day* のテーマの3点から推察するように、HPはIshiguroが読者に送りたいメッセージのヒントになるのではないだろうか。

### 1.3.2 HPの生起の仕方

HPは話し手/書き手が自由に使うことができる。「現在形」はタイムレスなのでHPとして過去を表すのに何ら問題はないからである。Wolfson (1982)が「HP使用の自由」について3人の意見を引用している。

- (14) the present and the preterit were easily interchanged. [...] The interchange seems to be for no particular reason. The use of preterit or a present is probably determined by the choice of the individual writer. (Steadman 1917: 18)

(15) This so-called “historical present”, “dramatic present” or “imaginative present” is generally used unconsciously by the speaker, who sees the past so vividly that it seems actually present before his eyes, and the passage and relationship of time are lost. This historical present may alternate with the preterit. (Charleston, B.M. 1941)

(16) ‘But when the speaker gets so deeply involved that he forgets where he is as he speaks, and tends to place himself rather at the scene he is narrating, [...]’. (Joos. 1964)

このように HP を使う場合の決まりなどはないと断定できる。HP は話し手/書き手の意思で自由に使い分けができるのである。

### 1.3.3 HP と新しい情報

Wolfson は前段落の意見の他に、自身の考えを付け加えている。「過去形」から HP、または HP から「過去形」に変える時、パターンがあると述べている。1.2 で述べたように、HP が一旦生起すると HP が連続し、それから「過去形」にもどる。また、それが繰り返される。なぜそこで時制の変換が起きるのかについて述べている。

(17) As we have seen, the significant fact about the use of CHP lies not in the verb tense itself, but in the switching from past to CHP and from CHP to past in the story. Actions occur one after another in a series but in order to separate the actions into events, to introduce a focus and permit the narrator to give his own interpretation of what happened, the alternation between the two verb forms is used. By switching from one form to another, the narrator creates a division between two events. (Wolfson 1982:

45)

- (18) It is one of the uses of the present tense, which, in English, is timeless and has no semantic value of its own. Rather it is the switching between CHP and the past tense which we have labelled CHP alternation, which is the relevant feature, serving to mark off different events within the story. (*ibid.*: 52-53)

Wolfson は、この意見のためにそれぞれのひとまとまりの内容を HP と過去形を用いて区別している引用を挙げている。

- (19) RL: “Oh, that gas thing, man, that’s really weird...

I was in a gas ... see <sup>(3)</sup>, I got this cadillac--I drove a jeep for many many many moons but then I did a movie here in town. It was the first time I worked here in town in a long time

and you no longer *drive* to the studio and they *take* you to location. Now you *leave* your house and you *schlepp* all the way to location. (Interruption)

So anyway I bought this cadillac because the jeep was too cold and the rain in the morning--six o'clock driving [...] *gotta* get to work in the morning man, you *can't* go forty miles an hour on the freeway with the rain coming in the jeep and try to get to work. And you *gotta* look young and fresh when you get there. [...] And I said, ‘Mister, you’re not gonna get any gas in front of me.’

(Wolfson 1982: 38) (下線部は過去形、イタリック体は HP)

話の内容が変わる度に、「過去形」と HP の変換が起こっている。上記のように、話し手である Robert Lake は、意識することなく自動的に時制を変えている。この例から、話し手が話題を変える時、時制の変換が起こっていることが分かる。彼は、話し始めると夢中になってその話の場所へ行ってしまう。そして、HP を使って聞き手もそこへと連れていく。それから少しの間、HP を使ってそこに留まる、次の話題になると、現実に戻ってきて過去のことを「過去形」で話し出す。そして、また新たな内容になると、聞き手と共有したいという思いが募って HP に変える。その後、また「過去形」となる。Wolfson が述べているように、話し手は話している内容に応じて「過去形」と HP を使い分けているのだ。

#### 1.4 特殊な HP の生起

HP は新聞・雑誌の見出しに散見する。またほとんどの動詞が HP という小説もある。これら特殊な用いられ方とした HP について述べていく。

##### 1.4.1 新聞・雑誌に見出しにおける HP

新聞・雑誌の見出しによく HP が使われる。以下例文の引用である。

(20) The new terrorism comes to Ground Zero (*TIME* Nov.13, 2017)

(21) Accounts differ in sumo assault case, police find (*Japan Times* 20 Nov. 2017)

このように見出しには、HP がよく使用される。見出しの書き方として、RNN 時事英語辞典では「見出しでは、現在時制が進行形や完了形の代わりに用いられます。また現在形は現在のできごとと過去の出来事、両方を表します。」とある。では、なぜ HP が使用されるのかを前述の論を交えて3点で整理する。

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較

- a 見出しに要求される人目を惹く「簡潔さ」のため一番短い「現在形」が用いられる。
- b 過去に起こったことをそのまま過去形で表すと、すでに済んでしまったことになりそのことは、もうそこで終わってしまったように感じられる。HPを使うことで、今もその話題は続いていると伝えることができる。
- c HPで表すことで限りなく現在に近い「過去」を示すことができ、新聞・雑誌の本分である「より新しい情報」であることを強調することができる。

このような理由から HPが見出しに頻出するのである。

#### 1.4.2 HP だけで書かれている作品とその理由

ほとんどが HP で書かれている作品がいくつか見受けられる。その中から 3 作品を選び HP が使われている割合を調べ表にした。

題名	HP	過去形	その他	合計	HPの割合
The Handmaid's Tale (Atwood 1998)	137	5	20	162	84.60%
Cat's Eye (Atwood 1989)	123	5	9	137	89.90%
Gravity's Rainbow (Pynchon 1973)	83	7	17	107	77.60%

この結果からもわかるように上記の作家は HP をかなりの割合で使っている。では、作者はどんな意図で HP を主に使ったのだろうか。その理由を探る。

上記引用の 2 番目の訳本『キャッツ・アイ』（松田雅子・松田壽一・柴田訳 2016）のあとがきに次のようにある。

- (22) 文体として現在時制が多用されているが、これは被抑圧者の文化的発信や、過去の出来事の「侵入的回想」を示唆する重要な特徴である。しかし、日本語による翻訳で常に現在形で通すことにはかなりの困難が伴った。

この作品同様、*The Handmaid's Tale* の中で、アトウッドの大きなテーマである女性問題を HP で表現しているのではと推察する。読み手に登場人物の行動をより身近に、そして作者と一緒にその光景を目の当たりにしているように錯覚させている。日本語に翻訳した場合、その HP の文末が「ル形」になり、その結果、文体が単調になり、作品内の時の流れもなくなってしまう苦悩があとがきに表れているのである。

次に *Gravity's Rainbow* の HP について考える。

- (23) Matters have changed, and tense is now a present tense subject, since many novels, at present time, are written in the present tense. 'A screaming comes across the sky', writes Thomas Pynchon, beginning *Gravity's Rainbow* (1973), and the 760 pages that follow are written in the present tense. The practice, or fashion, has become international, and among major texts are written substantially or entirely in the present tense are [...]. (Harvey 2006: 71)

ピンチョンは、なぜこのような大作で HP を敢えて選んで使用したのであろうか。Harvey はこの論文の中で、HP は彼がこの作品を発表した1970年頃から作者の中で好まれ始めたと書いている。そして、その働きを次のように述べている。

- (24) The present tense, in other words, has recommended itself to major talent for major works in several languages. The practice is evidently more than a fashion — and, as noted, is distinctly new. (*ibid.*: 71)

- (25) it would not be hard to find, in the works of novelists cited already, many passages where the use of the present-tense is so

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較  
felicitous and powerful that it is aesthetically self-justifying.  
(*ibid.*: 76)

(25)の引用に「ぴったりで力強い」とあるように、全般にわたって新しい手法であった HP を使用することによって、戦争に従事し、もがいている主人公を読者に目の前で見てるように感じさせる効果を与えたかったのではと考える。ピンチョンの語り方を次のように述べている例がある。

ピンチョンは映画的に語りながら、その中でも過去の数々の映画について盛んに言及し、それだけにとどまらず、登場人物がフィルムを回し撮影し、さらに戦場の映画撮影隊まで登場し、映画全体の中の種々の映画群という入り構造をなしていることがわかる。(幡山 2013)

HP を一つの手法として上手く使用することで、ピンチョンはこの長編を入れ子構造の映画のように語り、読み手が入れ子として表現されたその場面、その場面の映像を見ているかのように感じさせているのである。

では、HP ばかりの中にある「過去形」はなぜ他の HP と違うのかを1.4.2で取り上げた3作品から探してみる。

(26) What he called his wife, once; maybe still does, but really it's a generic term. We are all *honey*. (Atwood 1998: 61)

(27) A little sharp wince of pain goes through me, and it did when I watched my brother cut his finger once on a piece of grass. (Atwood 1989: 61-62)

(28) [...] which Mother had Garrard's make up for him and which he considers exquisite. (Pynchon 1973: 17)

(26)と(27)の下線部のように明らかに語られているより以前の副詞や接続詞がある時や、(28)のように内容的にずっと以前のことを表している時に「過

去形」が使用されている。これは、どんなに HP が前後の文で続いていても、その副詞や接続詞、そして内容に呼応する形の過去形がこないと文が成り立たないためである。

## 1.5 特別な‘you’と HP の関係

瀬戸・山添・小田(2017)に「‘I’や‘me’という意味の‘you’が来ると、その後 HP が続く場合がある」という指摘がある。これを検証しよう。

### 1.5.1 ‘I’や‘me’という意味の‘you’と HP との関係

HP が生起する一つの規則性として、3 例を挙げる。これは、テニスのトーナメントで優勝した選手のインタビューである。

(29) レポーター：How does it feel to win Wimbledon for the first time?

選手：Well, when **you** train hard every day for years with one goal in mind, and some days **you** are just ready to give up, and then suddenly you find yourself at the top like this, **you** feel like **you** must be dreaming.

確かに自分のことを言っているのだが、話をすべて一般論にしているのである〔……〕この種の一般論は自慢話にならないようにと使われるケースが多い。(ピーターセン 1999: 92)

ピーターセンは、このように‘I’の代わりに‘you’を使うことで、その話を自慢話として「エラそうな印象」を聞き手に与えないようにするためである、と述べている。この論については確かに同感であるが、これに加えて、この種の‘you’は、HP と関係があると言えないだろうか。上記の引用の中で、選手は「現在形」のみで答えている。この時すでに試合は終わっているため、これらの現在形を HP と断定してもいいだろう。



もう一つ、同じ意味で使用される‘you’の見解がある。一般的化した表現の‘you’と比較したものである。

(30) 一般化の‘you’には2つの用法がある。①<ふつうに一般論を述べる用法>と、②<「私」を一般化して述べる用法>です。(中略)

②では、Iがyouに変化します。ここには、自分に起こること、自分が経験することが、似たような状況では誰にだって起こるんだ、「君」にだって起こることなんだよ、と相手に共感を求める気持ちが働きます。②の用法は、①の用法（一般論）に私的な共感願望を加味したものだと言えるでしょう。言い換えれば、内心の気持ちをyouに託して語る用法だと考えられます。[……] ②の用法に一言だけ付け加えれば、この種の用法は、話し手（私）の感情が高まった段階で現れやすいようです。この点でも①と一応区別しておくのがいいでしょう。(瀬戸・山添・小田 2017)

(29)の引用は、この②の‘you’に相当すると考える。このインタビューは、選手はウィンブルドンで初優勝した時のものである。選手の感激が極限に達していたに違いない。その場の観客と共にその感情を喜び合いたいという強い気持ちが、‘you’とHPに現れている、と推察する。

次に、同様の‘you’の引用を2例挙げる。‘you’の後に続く動詞にも注目したい。

(31) I’ve been having trouble collecting. I had one woman hid from me once. I had another woman tell her kids to tell me she wasn’t home. He says, “Mom, newsboy.” She *says* (whispers), “Tell him I’m not home.” I could hear it from the door. I came back in half an hour and she paid me. She’s not a deadbeat. They’ll pay **you** if **you** *get*’ em. Sometimes you *have* to wait ...

If I don’t *catch*’ em at home, I *get* pretty mad. That means

I gotta *come* back and *come* back and come back and *come* back until I *catch*' em. Go around about nine o'clock at night and seven o'clock in the morning. This one guy owed me four dollars. He got real mad at me for comin' around at ten o'clock. (Terkel 1972: xli) (下線部は過去形、イタリック体は HP, 太字は you)

新聞配達の少年のテリー・ピッケンズは、2文目から過去に起こったことを「過去形」で話し始め、過去形が3つ続く。その後、'says'<sup>(4)</sup>が2つ続くが、ここでは言及しない。次に、また3つの過去形がくる。それから、最初の HP である 's' が生起し、続いて 'I' や 'me' の意味の 'you' が3つ出てきて、その後9つの HP が続く。そして、過去形に戻っている。

テリーは、インタビュアーであるターケルに新聞代を集金に行った時のひとりの女性について話しながら、それまで何人もの購読者がなかなか支払いをしてくれなかったことを思い出していく。同時に、その時々の大変さや悔しさが蘇り、苛立ちが激しくなっていく。テリーの感情の高ぶりが頂点に達した時、どうしても聞き手であるターケルに彼の気持ちを理解し共感してほしいという思いで、自分のことを 'you' で表わしている。それと同時に、その時の臨場感をより伝えるべく動詞が過去形から HP に替わっている。この2つの相乗効果により、テリーの怒りが読み手にストレートに伝わってくるのである。

2つ目の 'you' の引用である。

- (32) '[...] If he does not mistreat you, then, well... **one** is rather mystified as to the cause of your unhappiness.' '[...] But then year after year went by, there was the war, Catherine grew up, and one day I realized I loved my husband. **You** spend so much time with someone, **you** *find you get* used to him. He's a kind, steady man, and yes, Mr Stevens, I've grown to love him.' [...] But that doesn't mean to say, of course, there aren't occasions now and

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較

then — extremely desolate occasions — when **you** think to yourself: “What a terrible mistake I’ve *made* with my life.” And **you** *get* to thinking about a different life, a *better* life **you** might have had. For instance, I *get* to thinking about a life I may have had with you, Mr Stevens. And I *suppose* that’s when I *get* angry over some trivial little thing and *leave*. But each time I *do* so, I *realize* before long — my rightful place *is* with my husband. After all, there’s no turning back the clock now. **One** *can’t* be forever dwelling on what might have been. **One** should *realize* one *has* as good as most, perhaps better, and *be* grateful.’ (Ishiguro 1993: 238-9) (下線部は過去形、イタリック体はHP、太字は‘one’と‘you’、‘better’は原本通りイタリック体)

結婚してミセス・ベンになったミス・ケントンは、2行目から5つの「過去形」でそれまでのことを話し始める。それから、2つの‘you’が生起する。すると同時に、動詞が過去形からHPに替わり、そのまま最後まで続いている。その間、3つの‘you’も続けて生起している。

スティーブンスは、このミス・ベンとの再会が最後であると考え、敢えて聞きにくいことを尋ねている。この場面は、お互いの想いを語らず、二人の静かな時間を過ごすという物語のクライマックスである。二人共、時間は取り戻せないことを重々承知の上であるし、生活が変わるとも思ってはいない。ミセス・ベンも、自分の秘めた想いをこの‘you’に込めたのだろう。ここに出てきた5つの‘you’は「一般化したもの」と捉えられるかもしれないが、ミセス・ベンはHPを使用しながら自分自身の過去を話している。彼女は、‘you’を畳み掛けるように続けて言うことで、スティーブンスへの本心を隠し、もはや二人は元には戻れないと、自分に言い聞かせていると推察する。そして、その‘you’に心の内を託して、スティーブンスに訴えているのかもしれない。従って、ここでの‘you’は、ミセス・ベン自身のことなので‘I’と考えるのが当然であろう。

さらに、これらの‘you’が‘I’である理由がある。引用の最後の2文に3つの‘one’がある。これらは、「一般の人々」を指している。ミセス・ベンは、自分を‘you’とし、一般の人々を‘one’と区別して使い分けているからだ。

ここで‘one’について触れておきたい。この‘one’にも‘I’の代わりに使われる場合がある。

(33) you は比較的カジュアルな感じだが、より改まった印象の one を使うことがある。たとえば、

**I** think we should accept the job. (私は、その仕事を引き受けるべきだと 思う.)

と、はっきりと言う勇気のない人は、

**One** feels it might not be an inappropriate ideas to accept the job. (その仕事を引き受けるという考えは不適切ではないような感じもあるでしょう.)

と、気取って回りくどい言い方をするかもしれない。(ピーターセン 1999 : 93)

このように、‘one’が‘I’の代わりに用いる場合がある。(33)の1行目の‘one’は、スティーブンスがこの‘I’の意味で使っていると考える。彼は非常にプライドが高いので、なかなか本心を見せない。ここでも彼は、‘one’を使うことで、自分がいかにミセス・ベンを愛し心配しているかを遠巻きに話している。この‘one’は、スティーブンスの性格によく合っている。彼はいついかなる時でも自分の感情をコントロールすることができ、自分を表に出さないことに徹する。(32)の1文目の翻訳を見てみよう。

(34) ご主人があなたをひどく扱うのでないとしたら、あなたの家出の……不幸の理由は何なのか、私はいささか当惑を覚えるのです。(土屋 1990)

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較  
やはり、この‘one’は「私」であり、スティーブンス本人である。イシグロは、  
同じ‘one’をミセス・ベンは「一般の人々」として、スティーブンスは「私」  
として使い分けをしているのだ。

「私」としての‘you’は、HPによく似ている。どちらも話し手/書き手が、  
聞き手/読み手に自分たちの「強い想い」を伝えて共感してもらいたい場合に  
生起するからである。

従って、‘you’がHPと一緒に現れやすいのは、論を俟たない。

この節は、英語におけるHPの生起の仕方、役割について述べた。HPを  
使用する目的は、話し手/書き手が過去に起こったことを聞き手/読み手に理  
解し共感してもらいたいからである。特に、会話の場合、話し手の感情が最高  
潮になった場合にHPに替わる傾向があることが分かった。

## 2. 日本語における歴史的現在 (HP)

この節では、日本語におけるHPについて述べていく。HPの定義、助動  
詞「た」の多様性、HPの生起とそのパターン、HP使用の目的について述べ  
ていく。

### 2.1 日本語におけるHPの定義

日本語におけるHPの定義を考えるにあたって、以下の2例を挙げたい。

#### (35) 大塚・中島(1982: 537)

historic(al) present 〔文〕(歴史的現在)過去の出来事をいま眼前で  
起こっているかのように、生き生きと叙述するために用いられる現在  
時制の一用法をいう。Jespersenはこれを劇的現在(DRAMATIC  
PRESENT)と呼んでいる。文学作品の中に多くの例が見出させる  
が日常会話の中でも聞かれる。

#### (36) 新村(2008)

現在法：修辞法の一つ。過去の事、未来の事、眼前にない物事を眼前に存するように表現する手法。現写法。

どちらの引用も、1.1で述べた英語の定義とほとんど同じである。だが、英語と日本語の HP の用法については同じではない。英語の時制は、特別なケースである HP を除いては規則に則っている。一方、日本語では、過去を表す「タ」形と現在形を表す「ル」形が頻繁に交替する。

## 2.2 「た」の歴史

まず、日本語における HP を論じる前に助動詞「た」について触れる。「た」の本格的な使用の歴史は浅く、明治初期に「言文一致」が取り入れられてから、用いられるようになった。明治初期に、外国文学が次々と日本に入ってきた時、二葉亭四迷は、初めて「た」を使った。それについての引用である。

- (37) 二葉亭の初訳、改訳『あひゞき』における翻訳文体の特徴をまとめると以下ようになる。二葉亭は、初訳ではツルゲーネフの原文にある過去形のロシア語動詞を「た」形を使って忠実に訳し出した。つまり、「た」形が日本文学史上初めて過去時制を表示する記号として使われたのである。一方、改訳で二葉亭は、原文のロシア語動詞の完了体と完了相に忠実な訳をした。その結果、改訳の中の完了相は「てみる」形で、完了相は「て了つた」形で強調され、「た」形は主に完了相を表す記号になった。 (コックリル 2015)

このように明治初期、二葉亭四迷によって「た」が初めて用いられたことや、言文一致運動により文語体から口語体が変わったという経緯を経て、現在用いられている「た」は、いくつかの働きをするようになった。

## 2.3 助動詞「た」の働き

前項の「た」の働きの例として5つ挙げる。

- (38) (1) 次の授業は英語だったよね。  
(2) 赤い服を着た人が山田さんです。  
(3) たった今列車が出たところです。  
(4) 私の父は昭和六年に生まれた。  
(5) 邪魔者はどいた、どいた。

この5つの例の説明が以下に続く。

- (38)' (1) 「英語だったよね」は、未来の事柄なのに「た」が使われていて、命令を表すわけでもありませんから「確認」の用法だということになります。
- (2) 「赤い服を着た人」だと、「赤い服を着ている人」と同じ意味を表しています。ということは、「赤い服を着た」のが起こったのは過去だとしても、今でもその結果が残っているということで、こういう用法を「存続」と呼ぶわけです。
- (3) は、「列車が出た」のは過去だということがわかりますが、「たった今」という表現があるので、現在の直前に起きた事柄だということで、「完了」の用法になります。
- (4) が、「た」の1番典型的な「過去」を表す用法だということは、「昭和六年」という、はっきりと過去の時点を表す語句からもわかります。
- (5) 「どいた」が、「どけ」とおなじように「命令」を表していることも、特に問題なくわかるでしょう。(町田 2002)

これらの働きがあるにも関わらず、たいていの日本人は、「た」を過去形として認識している。これらの用法が、話し手/書き手が無意識のうちに「た」を自由に用いるという大きな理由になる。しかしながら、「た」が過去を表すとされていても、我々は現在形と認識している「る」をしばしば過去のことを表すものとして用いている。この理由を次項で述べる。

## 2.4 「タ」形と「ル」形<sup>(5)</sup>の混在

日本語での HP がなぜ頻繁に生起するかを述べる。

### 2.4.1 文献による「タ」形と「ル」形の混在理由

英語と日本語の HP の生起を比較すると、日本語の方が圧倒的に頻度が高い。この大きな理由の一つに、話し手/書き手が文末の「タ」形で終わるといふ単調さを嫌うということが挙げられる。2例の「タ」形と「ル」形の混在理由である。

(39) 私はまた途中で文書を読みかえして、過去形の多いところをいくつか現在形になおすことがあります。これは日本語の特権で、現在形のテンスを過去形の連続の間にいきなりはめることで、文章のリズムが自由に換えられるのであります。日本語の動詞がかならず文章のいちばん後にくるといふ特質（倒置法を除く）によって、過去形のテンスが続く場合には「……した」「……た」「……た」という言葉があまりに連続しやすくなります。そのために適度の現在形が必要であります。

また私は『潮騒』のように物語的小説では「……であった」という語尾をたびたび使いました。この言葉は物語的雰囲気が強めます。しかしリアリズムの小説に「……であった」がたくさん使われると、内容をあまりにロマネスクに見せすぎるきらいがあります。(三島 1973)

日本語の文は、倒置法を除いてたいてい動詞（+助動詞）で終わる。従って、話し手/書き手が過去にすでに起こったことを述べる時「タ」形だけが次々と続くことが多い。それゆえに、三島は所々に「ル」形を用いたのだ。しかし、三島は、どんなところに「ル」形を用いるかについては言及していない。ただ、文の「リズム」のことを述べているだけである。三島が言う文全体のリズムの他に、現在形には、「今、そういう状態である」というリズムカルなニュアン



英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較  
スが確かにある。このリズムが HP の特徴である聞き手/読み手に、より強く  
印象づけることができるのだ。2つ目の例を見てみよう。

- (40) われ、の国の言葉にもテンスの規則などがないことはありませんけれども、誰も正確には使っていませんし、一々そんなことを気にして  
いては用が足りません。「した」と云えば過去、「する」と云えば現在、「しよう」と云えば未来であります、その時の都合でいろゝになる。  
一つの連続した動作を叙するにも、「した」「する」「しよう」を同時に使ったり、前後して使ったり、全く規則がないにも等しい。だがそ  
れでいて実際には何の不便もなく、現在のことか過去のことかはその場、で自ら(おのずか)判別がつく。(谷崎 1975)

谷崎が指摘するように、日本人は話したり書いたりする時、HP と過去形を自由に使い分けることができる。以下は、いかに頻繁に生起するかの1例である。

- (41) その代りまた鴉が何処からか、たくさん集ってきた。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷗尾のまわりを啼きながら、飛びまわっている。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである<sup>(6)</sup>。(芥川 1960)

この引用は、4文になっており、それぞれの文末が、「た」、「る」、「た」、「る」と一文ずつ交互に「タ」形と「ル」形、すなわち過去形と HP が混在している。ここで用いられている2つの「る」により、聞き手/読み手は、まるでその場にいるかのように感じられる。そして、彼らは、一瞬にしてこの物語に入り込むのだ。このように一文ごとと変わることができるのは、三島が言う通り「日本語の特権」である。では、なぜこのようなことが可能なのか。次の引用を見てみよう。

(42) この日本語の独自の発想は、言ってみれば、話し手も聞き手も、話の文脈に添って順に場面の動きを追っていき、常に現在の視点で話の内容を眺めていく方法である。あたかも点字を手で読み取り理解していくのに似ている。発話の時点に位置を据えて、内容を過去だ未来だと選別する姿勢とは全く異なる。このような“俯瞰する発想”ではなく、爬虫類のように、絶えず「文脈」という道の上をはって行く態度であるとも言える。

このような表現意識に立っているから、話に現れる事態は、その都度一つ一つ確かな状態になっているか、そうでないか、確かめてから先へと進む姿勢が生まれる。(森田 1995)

この日本語の特性のお蔭で、聞き手/読み手は意識することなく HP で表された内容を過去に起こったこととして理解できるのである。よって、(41)のような極端な「タ」形と「ル」形の混在も、読み手に全く違和感を覚えさせないのである。

これら2つの引用にあるように、日本語においての HP は自由に生起する。しかし、その中にも「規則性」があるので次項でそれについて述べる。

#### 2.4.2 前項以外の「タ」形と「ル」形の規則性

(40)で谷崎が、日本語のテンスには「全く規則がないにも等しい」といっているが、「タ」形と「ル」形の変換には2つのパターンがある。

a 日本語の場合、文末の動詞が時制を示す。話し手/書き手が過去に起こったことを表す時、文末の動詞（普通、主節にある）だけを過去形にし、その前の動詞（従属節にある）は HP で表す。最後の動詞を過去形にすることで、その文にある HP の動詞もまた過去形として理解されるからである。この規則は「タ」形と「ル」形の混在を頻繁に、そして容易にする。次の例を見て英語と日本語の違いを比較する。

She said she was satisfied with the result.

彼女はその結果に満足していると言った。

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較

英語の文では、「時制の一致」の基づき、‘said’と‘was’はどちらも過去形になっている。一方で日本語の文では、従属節の動詞の「満足している」と「ル」形を用いて「過去」を表している。そして、文末の動詞「言った」はこの文の時制を表す「過去形」だ。従って、日本語の規則に則って、「満足している」は過去のある時点で「満足していた」という意味となる。この規則も「ル」形である HP を生起し易くしている要因になるといえる。

- b 三島も谷崎もどのように「タ」形と「ル」形の変換をするのかについては言及していないが、もう一つの規則がある。動詞には「状態動詞」と「非状態動詞」があり、それによって使い分けができるのだ。以下がその引用である。

(43) そもそも動詞には、意味から考えて二種類のものがある。何か、ある現象が生起することを表すものと、ある状態にあることをあらわすものと。[……]＜現象＞の方は、生起するかしないかで、大きなちがいができる。そこで、こっちは、すでに起こったことは、＜過去＞の形にする。が、＜状態＞の方は、元来時間的に長いもので、したがってあとまで続くものであるから、一々その状態が終わったことを報告することもない。そこで非過去にしているのである。

つまり、日本語のセンテンスで、すべての末尾の動詞を＜過去＞の形にしないのは、それで間違いを起こす心配がないからである。そのうえ、センテンスの終わりの単調さをきらう人にとっては、＜過去＞の形・＜現在＞の形の混用は、文章に変化を与える効果もある。(金田一 1988)

金田一は、動詞をある状態にある「状態動詞」とある現象が生起する「非状態動詞」との2つに分けて論じている。「状態動詞」には、非過去の形である「ル」形を、「非状態動詞」には過去の形である「タ」形を使うという意見だ。その理由に次の文を引用している。

- (44) ちょうど岩のおもてに朝日が一面にさしている。安寿は、暈なりあった岩の、風化した間に根をおろして、小さいすみれの咲いているのを見つけた。そして、それを指さして、厨子王に見せて言った。(森 1988: 173)

1文目の動詞「さしている」の「……ている」は、ある状態が続いていることを表しているので、「ル」形が用いられている。それに対して2文目と3文目は、「見つけた」「言った」という過去形の動詞で終わっている。これら2つの動詞は、ある状態が生起するという意味で、もうすでにその生起が済んでしまっていることを表す過去形が用いられている。従って、金田一の説が当てはまる。しかしながら、この論が必ずしもいつも成り立つとは限らない。以下の引用を見してみる。

- (45) ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男の外に誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男の外には誰もいない。(芥川 1960: 6)

ここに6文があり、それぞれ6つの動詞で終わっている。そして、全ての動詞が「状態動詞」になっているので、金田一の説から考えると、全て「ル」形になるはずである。しかし、2文目の動詞が過去形になっている。芥川は、なぜこの動詞「待っていた」だけ「タ」形で表したのであろうか。何か理由があるはずである。(36)で示したHPを用いる「現在法」は修辞用法のひとつである。もちろん目的は、聞き手/読み手により強く印象を与えることだ。「待っていた」の「タ」形に対して、筆者の考えは、「現在法」の真逆の効果を狙ったのではないかと、ということである。冒頭の第1段落の中で、他の「ル」形の中に「タ」形をたった1つ用いることでその文を際立たせると仮定した。こうす

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較ることにより、芥川は2つの目的を果たそうとしたのだと推察する。1つは、主人公下人の紹介と、もう1つは、下人がその時までである一定の時間、そこで雨が上がるのを待っていたことを強調させるためである。仮に、この「タ」形を他の「ル」形と一緒にすると、単調になってしまう。1つの「タ」形の効果により、下人が印象づけられ、冒頭の段落から読み手をこの物語の世界へ瞬間移動させているように錯覚させるのだ。

日本語の文法に基づいて用いられる HP と「状態動詞」の HP の規則性について述べてきたが、次項では HP の生起パターンについて考察する。

## 2.5 HP の生起パターン

HP の「規則性」についてとまでは至らないが、生起パターンについて2つの方向より論述する。

### 2.5.1 過去の事柄についての過去形と HP の使い分け

「タ」形は、過去の前のことを話し手/書き手が表す時にも用いられる。英語では過去完了という時制があるが日本語では、過去の時と同様に「タ」形を用いる。そして、話し手/書き手がまるで過去に起こった現場で実況しているようにその様子を「ル」形を用いて表現することがある。(45)の引用にある動詞を英語と比較する。

日本語	英語	実際に起きた時制
ある	is	過去
待っていた	was waiting	ある過去の前
いない	is not there	過去
とまっている	settle on something	過去
ある	exist	過去
いない	is not there	過去

この表から、実際に過去に起きた時を起点とし、その時の出来事を HP で表し、またその時点から前のことを表すのに過去形が用いられていることが分か

る。つまり、「タ」形と「ル」形の混在の一つの規則性として、この過去形と HP の使い分けを挙げることができるだろう。

### 2.5.2 話題と過去形と HP の入れ替わり

もう一つの規則性は、1.3.3で Wolfson が述べていることである。彼女の意見が、日本語でも英語と同様に当てはまる。一つの段落の中にいくつもの小さな話が述べられているとき、その話の内容が替わるたびに時制の入れ替わりが生起するのだ。話し手/書き手が時制を変える度に新しい内容が始まるのである。次の引用を見てみよう。

- (46) ① 一人きりで誰も話相手はない。/ ② 読むか書くか、ぼんやりと部屋の前の椅子に腰かけて山だの往来だのを見ているか、それでなければ散歩で暮していた。散歩する所は町から小さい流れについて少しずつ登りになった路にいい所があった。/ ③ 山の裾を廻っているあたりの小さな潭になった所に山女が沢山集つている。そして尚よく見ると、足に毛の生えた大きな川蟹が石のように凝然としているのを見つける事がある。/ ④ 夕方の食事前にはよくこの路を歩いて来た。冷々とした夕方、淋しい秋の山峡を小さい清い流れについて行く時考える事はやはり沈んだ事が多かった。淋しい考だった。/ ⑤ 然しそれには静かない気持ちがある。/ ⑥ 自分はよく怪我の事を考えた。一つ間違えば、今頃は青山の土の下に仰向けになって寝ているところだったなど思う<sup>(7)</sup>。(志賀 1968: 24) (傍線は時制、内容が替わるたびにスラッシュ)

志賀は、この段落で内容を小さく 5つのグループに分けている。その内容が変わる度に「現在」→「過去」→「現在」→「過去」というように時制を替えている。それぞれの内容は次のとおりである。

- ① 主人公のその時点の状況
- ② 主人公の過ごし方

- ③ ②の具体例
- ④ 主人公の夕方の過ごし方の具体例
- ⑤ ④の逆の意見
- ⑥ ⑤の具体例

それぞれのグループは、違った内容を述べているので、Wolfson の意見に当てはまっている。志賀は、この段落の時制を替えることで、それぞれの内容を分けているのだ。この過去形と HP の交替は、HP の生起の規則性として認めることができよう。

### 2.5.3 HP の頻度が高い物語

日本語の物語の文は、たいてい「夕」形で終わっている。しかしながら、HP をかなり頻繁に使う作家もいる。頻度の多い2作品を、文尾を「夕」形と HP に分けた比較の表である。

題名	「夕」形	HP	文の合計	HP の割合
父の詫び状 (向田 1978)	76	61	137	約45%
越前ガニ (開高 1981)	13	127	140	約91%

どちらの作品も高頻度で HP を使用している。それによって、読み手を作品にある現場へと招いているのだ。向田は、過去を振り返っていくつかの出来事を著わしている。その中でも特に想いの強い場面を HP で描いている。従って、読み手は、HP を通してその時々々の出来事を、向田と一緒に経験しているように読み進めていくことになる。開高は、91%という割合で HP を使用している。これにより、読み手は、開高の表現を読みながら、まるで彼と対座して、飲んだり食べたりしているようにおいしく感じるのだ。開高はまた、「あなたは、1歩うしろへさがると、文中に一度だけ「あなた」と書いている。波止場の魚市場で、船から上がったばかりのカニを食べる場面である。「あなた」と書くことでストーリーの中に「読み手」を登場させているのだ。読み手は、恰も書き手と一緒に魚市場にいて茹で上がった熱々のカニを味わっているような気になる。HP の連続と、この「あなた」の登場によって、益々、臨場

感が高まるのである。

では、この「HPの割合」の2つの数字、45%と91%の大きな違いはなぜだろう。これは、物語の内容によるものだと考えられる。『父の詫び状』は、複数の違ったエピソードからできている。それに対して、『越前ガニ』は、越前海岸にずっといるという設定でできているので、そこからの移動はない。そのため、ほとんどがHPで書かれても違和感を全く覚えさせず、反対に書き手と読み手が一緒の場所にいるような錯覚さえ起こさせてしまうのである。

このようにHPを用いることを、瀬戸・山添・小田(2017)は、「リングサイド効果」と呼び、「テレビでボクシングの生中継を見るのと、リングサイドで観戦するのとでは、ずいぶん雰囲気異なるでしょう。」と述べている。向田も開高も、HPを用いて読者を彼らの世界に瞬間移動させ、一緒に同じ体験を分かち合いたいのだろうと推察する。

この節では、日本語におけるHPについて述べてきた。言語の性質上、英語より日本語のHPの生起が多いが、英語と同様に、話し手/書き手の伝えたいという強い想いを表す一つの用法であることを示した。

### 3. 翻訳における例外的なHP

英語で過去のことはほとんどが過去形で表現される一方で、日本語に翻訳する場合、HPを用いることは少なくない。しかし、その例外があるのだ。

#### 3.1 英語ではHP，日本語では過去形

物語が日本語から英語に翻訳される場合、HPが用いられても過去に起きたことは過去形で翻訳される。その反対に、英語を日本語に翻訳する場合、過去形であってもHPにすることが多々ある。だが、英語ではHPなのに、日本語では過去形になっている例がある。

##### 3.1.1 日本語から英語への翻訳の場合

以下は、日本語から英語に翻訳したものと、その際、敢えて、過去形をHP



英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較にした説明の引用である。

(47) They say I'm tough. Well, maybe I am. But how about last year? Listen to this, Nobu: that runt of Shota's swings on my little brother, that's what. And then they all jump on him. [...] My father's the chief, but I'm the tail end, that's what he says. How do you like that? I'm pulling off the float myself, but I'm all for showing 'em when I hear about it, only my father starts shouting at me and I have to take it all.

さて『たけくらべ』のうち、ここに取り出した部分は、去年または一昨年のことをいっているのであるが、この部分の訳を“I'm off pulling ~”、と現在進行形にただけでなく、全部現在形の動詞にした。これは過去のことを話しことばで述べる場合のアメリカ語の特徴であって、このように現在形にするほうが生き生きする。

(Seidensticker 1962)

Seidensticker は、日本語では過去形である箇所を、敢えて HP で表わしている。彼が、日本語から受ける印象を英語でそのまま過去形にただけでは、物足りなかったのだろう。冒頭から語り手の影のように、準主役の長吉が時折、語り手になっている。この引用は、長吉が主に信如に語りかける場面である。長吉は、以前起こした喧嘩などを思い出しながら、信如に味方になってほしい、と頼むのである。この引用部分は、文語体で書かれた前段落の地の文と大きく変わっている。引用部分の段落は、口語体になっている。Seidensticker は、樋口が意図したこの文体の違いを HP で表すことで、この場面が映えてくる、と考えたのではないか。長吉も語り手であることと、長吉の切なる願いを HP でテンポよく表したのである。ここに訳者としての思い入れが感じられる。

### 3.1.2 英語から日本語への翻訳の場合

英語から日本語に翻訳したもののうち、英語では HP だが日本語は過去形になっているものを2例挙げる。傍線は、それぞれの時制である。

- (48) たとえば、「品格」の何たるかについてミスター・スミスが言っていたことです。その主張には、真剣に検討してみるに値する内容はほとんどないと言ってよかろうと存じます。もちろん、ミスター・スミスは「品格」という言葉を、私の理解とはまったく異なった意味で使っておられました。(土屋1990: 233)

For instance, there is the matter of Mr Harry Smith's pronouncements on the nature of 'dignity'. There is surely little in his statements that merits serious consideration. Of course, one has to allow that Mr Harry Smith was employing the word 'dignity' in a quite different sense altogether from my own understanding of it. (Ishiguro 1988: 194)

- (49) 人生で一つの道を選ばれました。それは過てる道でございましたが、しかし、卿はそれをご自分の意思でお選びになったのです。少なくとも選ぶことをなさいました。(前掲書: 294)

[...] He chose a certain path in life, it proved to be a misguided one, but there, he can say that at least. (*ibid.*: 243)

両方の引用とも、英語では HP、日本語では過去形となっている。イシグロは、1.3.1で述べたように HP を用いることで、スティーブンスのダーリントン卿への内に秘めた畏敬の念を表現したかったのだらう。しかし、訳者の土屋は、HP を過去形で表している。なぜだろうか。(48)では、2つ理由が考えられる。スティーブンスは、ミスター・スミスが話している場面を思い出しているので、この時点より前のことは過去形にした。もう一つは、過去形を用いることで

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較「断定」の意味が強くなり、英語の HP の効果のようにスティーブンスのゲーリントン卿への忠誠心を強調できる。(49)では、彼は、文の調子を乱さないため、この形をとったのだろう。ここでの「なさいました」を仮に「なさいます」とすると、日本語では、おかしい文になってしまうからである。この「なさいました」という言葉自体に、スティーブンスの品格が表れている。このように、翻訳する場合、それぞれの言語に合った言葉遣いをするので、必ずしも時制が一致するとは限らず、英語では HP、日本語では過去形という場合も例外ではないのである。

この節では、普通は英語では過去形を、日本語では HP を用いることはあるが、その逆もあることを述べた。訳者は、原作者がどんなメッセージをを読み手に伝えようとしているかを考えながら、原作で用いられている時制に捕らわれることなくそれぞれの言語に合った翻訳をしているのである。

#### 4. 結論

英語と日本語の HP をそれぞれ探りながら、2つの言語における HP の用い方を比較した。どちらも HP は、聞き手/読み手に正に目の前でそのエピソードが起きているように感じさせる用法である。しかしながら、勿論、言語の違いからくるものもある。以下が、本稿のまとめである。

- a 英語においても日本語においても、HP は聞き手/読み手に話し手/書き手が彼らの強いメッセージを伝えるための用法である。それは、話し手が感極まったり、興奮したりした場合に生起し易い。物語では、主にクライマックスに達した時に生起する。また、自分たちのテーマを読み手に理解できるように何気なく HP を用いて誘導する作家もいる。
- b HP の生起の仕方は、それぞれの言語で違いがある。英語の HP は、一度、HP が現れると、複数の HP 文が続き、HP が過去形の間に挟まれるような「サンドイッチ型」で生起する。一方、日本語では、文尾が「タ」形ばかり

で終わるのを避けるために、英語より頻繁に HP が生起する。このように生起の仕方に違いはあるが、どちらの言語でも、話し手/書き手が HP を用いる目的は、同じであると言えよう。聞き手/読み手に彼らの熱い思いを伝えるためである。

- c 'I' という意味で使われる 'you' もまた、話し手の感情が高ぶったり、興奮したりする時に用いられる。この 'you' も HP 同様に話し手の強い思いを聞き手に伝える役目を担っている。さらに、この 'you' が現れると、その後に HP が続くというヒントになる場合もある。従って、同様の働きを持つ、HP と 'you' が共に生起することも理に適っている。

今後は、'you' についてもっと掘り下げて調べていきたいと考えている。

#### 注

- (1) Conversational Historical Present
- (2) 原文がイタリック体になっている。
- (3) この 'see' は、間投詞の働きをしているので HP から省く。
- (4) 'say' は、'think' や 'know' のように時制のルールに従わない場合があるのでここでは省く。
- (5) 2.4 より「タ」形は過去形を、「ル」形は HP とする。
- (6) 「のである」はその文を強調したり断定したりするので、この「る」は省く。
- (7) 「思う」は現在形であるが、その前の「た」が示しているように、過去に起こったことを述べているので、この文も過去形とする。

#### 引用文献

- 芥川竜之介.(1960). 『羅生門・鼻・芋粥・偷盗』東京:岩波書店.  
Atwood, Margaret.(1989). *Cat's Eye*. New York: Bantam.  
Atwood, Margaret.(2016). 『キャッツ・アイ』(松田雅子・松田壽一・柴田 訳).  
Atwood, Margaret.(1998). *The Handmaid's Tale*. New York: Anchor Books.  
Charleston, B.M.(1941). *Studies on the Syntax of the English Verbs*. Berlin: A. Francke.  
二葉亭四迷.(1985). 『二葉亭四迷全集第二号』東京:筑摩書房.

英語における“Historical Present”と日本語における“歴史的現在”の比較

- Harvey, John. (2006). *Fiction in the present tense* (参照日2017.12.10).  
<http://englishprogramme.pbworks.com/f/19912151%2520Fiction%2520in%2520the%2520Present%2520Tense.pdf> (参照日2107.11.30).
- 幡山秀明. (2013). 「トマス・ピンチョンの『重力の虹』論」『宇都宮大学教育学部紀要』. 第1部 Vol.63: pp. 221-229.
- 樋口一葉. (1968). 『たけくらべ・にごりえ』東京:角川書店.
- Ishiguro, K. (1989). *The Remains of the Day*. New York: Vintage Books.
- イシグロ, カズオ. (土屋政雄訳1990). 『日の名残り』東京:中央公論社.
- Joos, M. (1964). *The English Verb*. Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press.
- 開高健. (1981). 『地球はガラスのふちを回る』東京:新潮社.
- 金田一春彦. (1988). 『日本語 新版 (下)』東京:岩波書店.
- コックリル浩子. (2015). 『二葉亭四迷のロシア語翻訳』東京:法政大学出版局.
- 町田健. (2002). 『まぢがいだらけの日本語文法』東京:講談社.
- 三島由紀夫. (1973). 『文章読本』東京:中央公論新社.
- 向田邦子. (1978). 『父の詫び状』東京:文藝春秋.
- 森鷗外. (1968 [1988]). 『山椒大夫・高瀬舟』東京:新潮社.
- 森田良行. (1995). 『日本語の視点』東京:創拓社.
- 大塚高信・中島文雄. (1982). 『新英語学辞典』東京:研究社.
- ピーターセン, M. (1999). 『心にとどく英語』東京:岩波書店.
- Pynchon, Thomas. (1973). *Gravity's Rainbow*. New York: Viking Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Edinburgh Gate: Pearson Education Limited.
- Schiffrin, D. (1981). Tense Variation in Narrative, *Language*, Vol.57:1, 45-62.
- サイデンステッカー, E. G.・那須聖. (1962). 『日本語らしい表現から 英語らしい表現へ』東京:培風館.
- 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望. (2017). 『認知言語学演習1 解いて学ぶ認知言語学の基礎』東京:大修館書店.
- 志賀直哉. (1968). 『小僧の神様・城の崎にて』東京:新潮社.
- 新村出(編). (2008). 『広辞苑』(第6版). 東京:岩波書店.
- Steadman, J. M. (1917). The Origin of the Historical Present in English, *Studies in Philology* XIV: 1-46.
- 谷崎潤一郎. (1975). 『文章読本』東京:中央公論社.
- Terkel, S. (1972). *WORKING: People Talk About What They Do All Day*

*and How They Feel About What They Do*. New York: The New Press.  
綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘・ピーターセン, M. (英文校閲).  
(2000). 『ロイヤル英文法改訂新版』東京:旺文社.  
Wolfson, Nessa. (1982). *The Conversational Historical Present in American  
English Narrative*. Dordrecht: Foris Publications.

辞典

*LDOCE* = *Longman Dictionary of Contemporary English* (2014, 6<sup>th</sup> ed.).  
RNN 時事英語辞典. 「英語ニュースの読み方(見出し編)」.  
<https://rnnnews.jp/tool/pg/howtoread2.php> (参照日2017.12.15).

資料

Japan Times. 20 Nov. 2017.  
TIME. November 13, 2017.